

生涯研修プログラム

2. クリニカルカンファランス B.

2) 思春期における月経異常

東京女子医科大学教授 黒 島 淳 子

月経発来はそれ以降の排卵性卵巣周期の確立、妊娠といった女性としてのライフサイクルの出発点である。近年、青少年の身体発育の促進と平行して初経年齢が若年化する一方で、家庭環境の変化、受験などのストレスなどを背景とした月経異常を訴える女子が増加している。月経発来には視床下部・下垂体・卵巣軸だけでなく、成長ホルモン、副腎性のアンドロゲン(AD)に加えて松果体ホルモンであるメラトニン(MT)などが複雑に影響を及ぼすことが明らかとされている。過去10年間に当科の思春期外来を受診してきた月経異常のうち、原発無月経、遅発月経、続発無月経、月経不順例の内分泌動態と身体発育との関連につき検討した。月経異常例の Body mass index (BMI)

は20前後と30前後の二峰性の分布を示し、これらの内分泌異常は前者は神経性食思不振症、後者は多嚢胞性卵巣症候群(PCO)の特徴を有していた。さらにMTとの関連では前者では低ゴナドトロピン血症、夜間MT高値を示す一方、後者では高LH、AD、プロラクチン分泌と同期しないMTの日内変動パターンが認められた。思春期月経異常例の血中テストステロン値とBMI、LH/FSH比には正の相関を認めたことから、月経異常の内分泌的背景にADとMTとの関連に興味を持たれる。本講演では思春期月経異常の内分泌異常に占めるMTの意義について動物実験の成績を交えて考察する。

3) HIV 母子感染

都立大塚病院医長 宮 澤 豊

ハーバード大学 AIDS global の報告によると、世界の HIV 感染者数はアジア地域を中心に増加傾向が続き、すでに推定2,600万人に達している。このうち、感染者全体における女性ならびに小児の感染者数の占める率が急速に高くなってきており、ここ数年、母子感染をいかに防止するかということが世界の重大な研究テーマのひとつとなっている。

母子感染によって HIV 感染小児が年間に5,000~7,000人も出生するタイや米国に比べると、我が国における母子感染例は15例(1995年8月末)とはるかに少ないが、このうちの12例は全体の感染者が増加した1991年以降に報告されたものである。女性感染者の増加に伴い母子感染も近

年増加の傾向がみられる。

また、同時期までの我が国の延べ感染妊産婦数は関東近辺を中心に最低でも99件にのぼり、このうちの65件が分娩に至っていること、近々分娩する予定の者、実際には把握できていない分娩などを含めると、感染者の妊娠・分娩例も決して稀なことではなくなっている。このような状況において、感染妊産婦や母子感染についての現状、特色、問題点などを知り、これらに正しく対応することは我々産婦人科医の責務である。

母子感染についてはいまだ不明な点が多く、対応も過渡的なものであるかもしれないが、実際の対応自体は決して難しいものではない。